

## ニセモノはなぜ、人を騙すのか

というより、人は何故ニセモノに騙されるかといった方が正しいのかも知れません。

古美術評論家でなんでも鑑定団でおなじみの中島誠之助氏は、「ニセモノは何故、人を騙すのか」という本を上梓していますが、その中で、ニセモノに騙される人間心理を鋭く指摘しています。

世の中には、実に沢山のニセモノが溢れています。ハンドバックやお財布、鞆等のブランド品にはどれ程のニセモノが混じっているか分かりません。中には、ニセモノと承知の上で身に付けている人もいたりして、その歪んだブランド品志向には首を捻るしかありません。

勿論、ニセモノ即悪という事でもないらしく、中島氏は「ニセモノがあるから、ホンモノが光るのである。ニセモノはこの世の小気味いいスパイスだから。」と述べています。

中島氏によると、掛け軸の90%、焼き物の80%はニセモノという話ですから、骨董美術の分野になると、何を信じてよいか分かりません。もっとも、私のお小遣い程度では、骨董美術品に手を出すことなど考えられませんが、テレビ番組の「なんでも鑑定団」を見てみると、見事に騙されている人の多さに驚かされます。

中島氏によると、ニセモノに引っかかる法則というものがあるのだそうで、それを紹介しますと、

第一の法則は、「人間の欲」が目をくらませるという事です。耳元で「これは儲かりますよ」と囁かれると、つい心が動いてしまう、そんな経験はありませんか。

第二の法則は、「懐が甘い」こと。つまり、小金持ちって事ですね。大きなお金だと手が出ない、その微妙な匙加減につい手が出てしまうんですね。

第三の法則は、「不勉強」だそうです。自分の目の前に、教科書に載っている作品に近いものとか、重要文化財とほぼ同様の品物とか、普段の暮らしとは隔絶された、近づきがたい物が現われた時に知識欲が刺激され、そこに奥深い

蘊蓄があればある程必死に調べようとする。そして、調べれば調べるほど、自分の都合の良い様に解釈して、どんどん墓穴を掘って行き、やがてはニセモノにひっかかってしまうという訳です。

中島氏は、知識という土台の上に、「欲」という家を建ててやれば、ニセモノを売りつける架空の舞台は、たちまちのうちに整うと述べています。

それでは、ホンモノとニセモノを見分けるにはどうしたら良いのでしょうか。

中島氏は、真贋の判断基準について、品物の持っている基本的な「ライン」の違いを挙げています。つまり、そのラインが自然なものか否かということで、本物には、善意のラインがあるのだそうです。逆に、ニセモノには嫌味なラインが伴うものだというのですが、正直全く理解不能の世界です。ですから、素人は骨董には手を出すなという事だろうと思います。

また、ニセモノには語りが多いたもいいます。つまり「伝来」、いわゆるいい伝えに無理があり、かつしゃべり過ぎるのだそうです。

「饒舌な語りの中に嘘がある」と中島氏はいいますが、これは人間にも当てはまりそうですね。余りに饒舌な人はかえって人から信用されないものです。

結局、ニセモノに引っかけられないためには、自分の目を鍛えるしかありませんが、その為には、出来るだけ多くの「美の現場を踏む事」であり、「良い物を何度でも見る事」なのだそうです。この当たり前の事の積み重ねこそ、物の真贋を見分ける目を養う決め手というわけです。

ところで、ホンモノとニセモノの存在というと、何も美術骨董品の世界だけではなく、人間だって同じことです。「あいつはホンモノだな」と感じさせられるような場面を経験したことはありませんか。

中島氏の言を借りれば、「生きる事に夢中な人間がホンモノのやつなのだ。」という事になります。また彼は、「ホンモノの人間は、自分が善意で一生懸命に進んでいるのだ。」とも指摘しています。

もっとも、世の中にはホンモノっぽいニセモノも氾濫しているのですから、その人がホンモノかどうか見極める目を養う必要があります。そのためには、素晴らしい人との出会いを沢山経験して置くことが何よりも重要でしょう。

骨董の世界には、目利きの修行のひとつに「捨て目をきかせる」という言葉があるそうです。これは、自然体でいながら常に周囲に注意を払うという意味だそうですが、美術骨董品を見る目も、人を見る目も、注意力散漫では鍛えられないという事は明らかなようです。(塾頭 吉田 洋一)